慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ボリシェヴィズム研究における内容分析と精神分析の方法 (一) : N·ライツの研究を中心として
Sub Title	Content analysis and psychoanalysis in the studies of Bolshevism : with emphasis on N. Leites' view (1)
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究 : 法律· 政治· 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.8 (1959. 8) ,p.14- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論說
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590815-0014

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ボリシェヴィズム研究における内容分析と精神分析の方法（一）

――N・ライツの研究を中心として――

奈良和重

一　アメリカにおけるボリシェヴィズム研究の諸類型
二　ライツの『ボリシェヴィズムの研究』と内容分析の概念
三　内容分析の一例示……以上本號
四　ボリシェヴィズムの精神分析的解釋
五　ライツの研究をめぐる問題點

一

革命後數十年のあいだにおこなわれてきたロシアに關する研究は尨大なものである。その量からいうと、おそらく、どのような研究主題の圖書目錄をもしのぐであろうと想像される。しかも、とりわけアメリカにおいては、最近における社會諸科學の著しい發展と對應しつつ、それらの新しいアプローチを、ロシア研究に適用する試みがなされ、多彩をきわめた研究

成果が、あいついで發表されてきている。しかしながら、われわれは、かくも目を奪われるほどのさまざまなアプローチに當惑させられてしまい、かえつて、泥濘に足をとられたような感なきにしもあらずである。氾濫が生じたからこそ、それを整理してみる必要性も生ずるのであろうが、J・S・レシェターの『ソヴェトの行動を分析し、豫測する諸問題』[1]という書も、こうしたロシア研究に對する方法論上の反省をあらわしている。では一體、どのような研究がおこなわれてきたのか。最近、ダニエル・ベルが『現實を探索する一〇の理論——社會諸科學におけるソヴェト行動の豫測』[2]と題する、注目すべき論文を *World Politics* 誌に發表しているが、それによつて、主にアメリカにおけるロシア研究を、そのアプローチの類型ごとにまとめてみると、つぎの十項目に範疇化することができる。

A 性格論的理論

(1) Anthropological　ルース・ベネディクトにはじまり、リントン、カーディナー、マーガレット・ミード、クライド・クラックホーンなど、最近の文化人類學者によつてなされているもので、《文化とパーソナリティ》の研究により、その概念をロシアの文化型の解明に適用した試みである。この種の立場をとるものとしては Margaret Mead, Soviet Attitudes toward Authority. An Interdisciplinary Approach to Problems of Soviet Character, New York, 1951 および、Geoffry Gorer and John Rickman, The People of Great Russia, London, 1949 などがあげられる。

(2) Psychoanalytic　政治研究に精神分析理論を導入したものとしては、ラスウェルとかエーリッヒ・フロムの著述によつて知られているが、こうした方法概念をボリシェヴィズムの説明原理にもちいたものに、Nathan Leites, The Study of Bolshevism, Glencoe, Ill., 1953 がある。

B 社會學理論

(3) The Social System　ハーヴァードのロシア研究所（The Russian Research Center）で發展させられた、社會・心

理學的理論に基づく研究であり、Raymond Bauer, Alex Inkeles, and Clyde Kluckhohn, How the Soviet System Works? Cambridge, Mass., 1956 に代表されるものである。

(4) Ideal Types　このアプローチは、ハーヴァード大學のバリントン・ムーアの諸著作に示されるもので、權力構造のモデル理論を設定し、それによつて、社會の發展過程を檢討しようとするものである。Barrington Moor, Jr., Soviet Politics: The Dilemma of Power, Cambridge, Mass., 1950 および、Terror and Progress—USSR, Cambridge, Mass., 1954 などがこれである。

C　政治理論

(5) Marxist　I・ドイッチャーによつてもつとも明瞭に示されているアプローチであつて、スターリン主義の獨裁をソヴェトの經濟的生產力との關連において捉え、したがつてそれを、歷史的に《必然的》な段階であるとする。彼の著書には、Issac Deutscher, Russia What Next?, London, 1953 および、The Prophet Armed: Trotsky 1879-1921. New York, 1954 などがある。

(6) Neo-Marxist　元來は、トロツキーの議論より發しているものであるが、ソヴェト社會の性格を《官僚的集團主義》であるとする見解で、アメリカにおいては、トロツキー主義者たちの出版する New International とか Fourth International に、その理論が展開されている。修正主義的見解を示したものとしては、James Burnahm, The Managerial Revolution, New York, 1941 および Trotsky, The New Course, New York, 1948 の改訂版の序文（Max Schactman）などがある。

(7) Totalitarian　ハンナ・アーレントの論ずるところであるが、かつてドイツで形成された社會形態も、現在のソヴェトのそれも、全體主義という範疇に屬するとする理論であり、Hannah Arendt, The Origins of Totalitarianism, New

York, 1951 がそれである。バートラム・ウルフも同様な見解を述べている。最近の論文としては、*Commentary* 誌一九五七年八月號があげられるが、著述には、Bertram D. Wolfe, the Three who Made a Revolution: Lenin, Trotsky and Stalin, New York, 1948 がある。

(8) Kremlinological　クレムリン内部におけるエリート層の權力闘爭に焦點をあわして、政治的事件を考察してゆくもので、フランツ・ボルケナウ、ボーリス・ニコラエフスキイの著述に親えるものである。今日の外交、ジャーナリズム關係の專門家がおこなう議論のほとんどがこれである。

D　歴史理論

(9) Slavic Institution　現代のロシアの行動様式を、スラヴ的な性格や制度の傳統との關連において、說明づけようとするアプローチである。はやくは、ベルジャエフとかペアスの見解にあらわれているが、現在、この種の獨特な思想を展開しているのは、《永遠なるロシア》というテーマを扱った Edward Crankshow, Cracks in Kremlin Walls, New York, 1951 である。

(10) Geo-political　ソヴェトの外交政策をロシアの歴史的な戰略的地位が映しだされたものとみる。今次大戰中にはやつた考え方であるが、いまだに支持者をもつている。ジョージ・ケナンやヘンリー・キッシンジャーなどの著作にも、幾分なりと、こうした考察がなされている。

以上のベルの分類は、先述したように、方法、ないしはアプローチの問題を中心としてなされたものである。このように、いちおう形式的に分類することができても、實際の研究においては、これらのアプローチは、どれかひとつに限定されているのではなく、多くの場合、幾つか重複して使用されていることはいうまでもない。とくに、文化人類學、社會學、心理學、精神分析學などに基づくアプローチには、これら諸學問間のいわゆる interdisciplinary approach が顯著に示され

ている。

ところで、アメリカにおいて盛んにおこなわれているロシア研究には、國際的緊張のさ中にアメリカがおかれている現在、敵國の情報活動のデータを收集し評價し、以て自國の軍事的・政治的政策のためにそなえる、という國家的要請に動機づけられた面も少なくない。そういつた事例をあえて否定しようなどとは思わないが、[3] その直接・間接の刺戟はなんであつても、その理論なりアプローチなりは、現代の社會諸科學によつて客觀的に裏うちされているわけである。かかる觀點よりすれば、アメリカにおけるロシア研究には、その國の學問的オリエンテーションと適應水準とが《反映》されている、とみることができる。そしてまた、ロシア研究が、われわれの關心を惹きつけずにおかないのは、それが、G・P・マードックの指摘するような意味において、地域研究のもつ課題や問題をいろいろと提起してくれているからにほかならない。すなわち、「……地域研究は、人間科學（human sciences）にとってすばらしい利益をもたらすことがあきらかとなろう。例えば、それは、こうした人間科學の適用を促進しうるのである。應用科學はつねに、抽象的原理を具體的狀況に關連づけることをともない、かくてそれは、抽象的原理に關してと同樣、具體的狀況に關しても精確な知識を必要とする。地域研究は、このような知識を供給する助けとなる。また應用科學は、附隨的にではあるが、ほとんどつねに、諸學問の交流をおこなう……。さらに地域研究は、純粹科學によつて檢證さるべき多數の假設を、當然示唆するであろう。……そして最後には、共通問題について一緒に研究してゆく研究活動が、學問上の境界を橫斷し、科學的知識を擴散するようになり、人間行動を扱う純粹科學にとつて、眞に實を結ぶ成果が示されるにいたるであろう」[4] と。

わたくしがロシア研究を取上げるのも、こういつた側面についてである。ロシアの《リアリティ》を客觀的に理解するということもさることながら、そこにおいて、多樣な變數が作用し機能しあつている全體構造を、《觀察可能な事實》（observable fact）として、いろいろな角度から究明しようとする努力のうちに、わたくしは、アメリカの社會諸科學の理論にお

ける方法と、そのテストの實狀を考察したいと考えている。所詮、方法を云々することは、それ以上に滿足のゆく解答を提供できずにおわつてしまうことが多い。しかしまた、方法が方法論として、いろいろと批判吟味されなければならない段階にあることは、それが今日に限つたことではないにしても、現代社會科學の特徴であるといつてよい。ともあれ、わたくしとしては、アメリカにおけるロシア研究を集約的に研究することが、政治體制（political system）、ないしは政治行動（political behavior）の理論的ジェネラリゼーションの探究にとつて、大いに示唆に富むものであることを疑がわない。わたくし自身は、今後おこなう研究の過程においては、先のアプローチの分類ごとに忠實にしたがつていくつもりはない。違つた項目、たとえば、ソヴェト・イデオロギーに關する純理論的な研究のごときは、獨立した範疇を設けて、取扱うべきものと思う。しかし、いちおうそれに手がかりを得て、考察をすすめることは有益であると考えられる。本稿では先ず、N・ライツのボリシェヴィズム研究――先の分類の第二番目の範疇に該當する――の方法に檢討を加えてみることとする。

（1） John S. Resheter Jr., Problems of Analysing and Predicting Soviet Behavior, New York, Doubleday & Co., 1955. 本書の Bibliographical Note は、けつして網羅的ではないが、英語で書かれたソヴェト關係の文献に關する限りでは、かなり詳細であり、かつレシェター自身の簡約な論評もふされていて、研究の手引としてはすぐれたものである。

（2） Daniel Bell, "Ten Theories in Search for Reality: the Prediction of Soviet Behavior in the Social Sciences" in *World Politics* Vol. X, No. 3, April 1958, pp. 327-365.

（3） たとえば、ランド財團（Rand Corporation）によるリサーチ・プロジェクトには、かなり顯著な程度に、こうした傾向が示されている。すなわち、それは、"to further and promote scientific, educational, and charitable purposes, all for the public welfare and security of the United States of America" と款定されている。そのシリーズとして、Nathan Leites, The Operational Code of Politburo; Irving L. Jennis, Air War and Emotional Stress: Psychological Studies of Bombing and Civilian Defense; Margaret Mead, Soviet Attitudes Toward Authority: An Interdisciplinary Approach to the Problem of Soviet Character; Philip Selznick, The Organizational Weapon: A Study of Bolshevik Strategy and Tactics など、現在までに、三十册以上が刊行されている。

（4）George Peter Murdock, "The Conceptual Basis of Area Research" in *World Politics*, Vol. II, No. 4, July 1950, p. 578.

二

ライツのボリシェヴィズムに關する研究には、『ボリシェヴィズムの研究』[1]という書がある。このほかに、エルザ・ベルノートとの共著『肅清の儀式』[2]があるが、これはその副題が示している通り、モスクワ裁判に關するケース・スタディである。前者は、主として、ボリシェヴィキと外部世界との外的關係の解明にあてられているのに對して、後者は、黨のトップ・レヴェルの內的關係の解明にあてられており、この意味で、兩者は密接な關連を有しているわけである。[3]したがつて、充分なる理解を得るためには、兩者をあわせて考察しなければならないが、ライツのボリシェヴィズムに對する研究方法を理解するという目的からは、兩者の主題の差異は、あまり問題とならない。それらは、まつたく同樣の方法によつているからである。しかも、ボリシェヴィキの行動一般を理解するという點からみると、むしろ『ボリシェヴィズムの研究』の方が重要である。わたくしは、本書によつて、ライツのボリシェヴィズム研究を考察してゆきたい。

ところで、いささか奇妙に聞えるけれども、この『ボリシェヴィズムの研究』は、嚴密にいうと、ライツの書いた本である、というのは正しくないのである。というのは、彼自ら述べているように、「本書の大部分は、わたくし自身の言葉でではなく、レーニンおよびスターリンの言葉、ロシアの詩、短篇小說、小說、戲曲からの拔萃というかたちで、あらわされている」[4]からである。このことは『肅清の儀式』についても同じことで、それはやはり、レーニン・スターリンの言葉、モスクワ裁判の記錄文書によつて綴られている。では、これらの書はいずれも、レーニン・スターリン全集、そのほか、小說や記錄の引用句からなる――ちなみに、『ボリシェヴィズムの研究』は、六三九頁、引用箇所三千におよぶ――いわば、アンソロジーにすぎないのか、というとそうではない。それらは、廣汎にわたる資料をただたんに搔き集めたのではなく、きち

んと分析され、コーディファイされているのである。それ故に、「ライツの著述をユニークなものにしているのは、彼が選擇している新しいカテゴリーと、とりわけ、彼の方法である」[5]といってよい。

そこで、ライツが設定しているカテゴリー、およびデータ解釋の問題であるが、それについて、彼はつぎのように述べている。「本書の主要な内容をなす構成をあたえるに際して、わたくしは、將來なしうるであろう内容分析（content analysis）のための《カテゴリー》を設定しておいた。わたくし自身は、そのような分析をおこなったわけではない。したがって、レーニン・スターリンの言葉に對して、わたくしと違った選擇をなせば、違ったコードが生じてくると主張する批判者を、拒絶しようとはしない。ただわたくしとしては、彼がそう試みるであろうことを、そしてわれわれ双方がともに、内容分析――もしそれが試みられるものとして――の決定を待ち構えているのだ、ということを示唆するだけである」[6]。そしてまた、「……わたくしは、ボリシェヴィキの信念のもつ無意識的な意味について推測――適切な證據を缺くために、それ以上のことはできない――をなしているが、それは、明白にか暗默のうちに、精神分析の諸命題をもちいている。しかしながら、わたくしがボリシェヴィズムの教義の前意識的および意識的内容をそのように描出したからといって――この點を强調しておきたいのだが――、なにも精神分析の理論を受けいれる必要はないのである。精神分析理論を受容して、わたくしのボリシェヴィズムについての描寫を拒否することは可能だし、あるいはまた、精神分析理論を拒否して、その描寫を受容しうるものとすることも可能である。精神分析理論とわたくしのなしたボリシェヴィズムの構成を、ともにわたくしが受けいれているとしても、そのことは、嚴密にいうと、關係ないことである」[7]と。

かくて、ライツの研究方法は、内容分析ならびに精神分析のテクニックに關連していることはあきらかである。もつとも、右にいわれているように、内容分析については、ライツがここに試みているわけではなく、なお今後の問題として取殘されている。というのは、もしも内容分析を、ボリシェヴィキの「信念の出現頻度の確立（the establishment of frequency

of occurence of the beliefs)」という意味に解すれば、彼の研究は、内容分析のための素材を提供しているにすぎぬからである。そこで、いささか横道にそれるけれども、《内容分析》なる概念を明確にしておかねばならないと思う。

内容分析というものは、歴史家、文學研究家、人類學者などが、廣く一般に、コミュニケーション内容を分析する場合にもちいてきたものであつて、その歴史的始源はかなり深いところまで遡りうる。けだし、「ある意味ではもちろん、内容分析は讀むこととともに古い」[8]とすらいえるからである。だが、すくなくとも過去十數年間に發展させられてきた、いわゆる内容分析とは、きわめて專門化された知識を要する新たな研究分野を開拓してきたものである。そして、その分析方法における技術的・理論的問題は、特殊の操作方式を案出し、數量化的方法をとりつつある。つまり、ケイプラン＝ゴールゼンの指摘するように、「内容分析にきわだつた特徴といえば、コミュニケーションを記述する他の技術と對照して、その量的側面である。内容分析は、《あれか・これか》についての印象的（インプレショニスティック）な《より多くとか少く》という判斷によつて提示されるより、もつと精密な數値的用語をもつて、内容分類をおこなうことを目指している」[9]。このように、最近における内容分析のもつとも著しい特徴は、數量化の要請（requirement of quantification）ということである。B・ベレルソンによると、これまでいろいろなされてきた定義を綜合すると、「内容分析とは、コミュニケーションの表明された内容を客觀的・體系的・數量的に記述するための調査技術（research technique）である」[10]（傍點著者）。

すなわち、内容分析は、當面の研究すべき内容と問題（プロブレム）にとつて、もつとも妥當にして有意味なカテゴリーを設定し[11]、それに内容を組織・分類して、そこにおけるカテゴリーの出現頻度を量的に測定する。かくして得られた結果は、分析者の主觀的・印象的な判斷とは異なつて、精密な數値によつて表現せられ、高度の正確さが保證されるのである。現在では、この内容分析の用途は、マス・コミュニケーションの領域はもとより、きわめて多岐にわたつており、數量化的方法の有効性がますます發揮されている。しかしながら、嚴密さという點で劣つていることはもちろんであるが、非數的（non-numerical）内

容研究のある種のものにも、充分精密な明察力をそなえたものが認められ、實際、内容分析として知られる研究文献のうちには、質的な内容記述の研究も多く含まれているようである。ベレルソンも先の定義を狹義的なものとし、《量的》内容分析（“quantitative” content analysis）に對して、《質的》内容分析（“qualitative” content analysis）――混亂をさけるため、他の專門用語が必要であるというのなら、かりに、内容評價（content assessment）といってもよい[12]――を度外視すべきでないとし、兩者の類似點と相違點とを詳しく論じている。

質的内容分析には、多くの場合、量的敍述が含まれていることは、しばしば見逃がされがちであるが、それは、準數量的(quasi-quantitative)であるといえる。たとえば、ベレルソンの引用例にもみられるように、ローエンタール＝グダーマンの『煽動の技術』の序文に、マックス・ホルクハイマーが、「……現代の煽動者や宣傳家は、自ら指導者の役割をになっていると思いこみながらも、たえずその追隨者のことを思いめぐらしていることは、注目すべきことである[13]」（傍點筆者）と述べているが、このように、《たえず》（incessantly）とか、《繰返して》（repeatedly）、《まれに》（rarely）、《いつも》（usually）、《たびたび》（often）というような表現形式は、たしかに數値的ではないにせよ、その意味するところは、數量化的表現と本質的に變らないことがある。つまり、内容の七三％は一定のカテゴリーに相當するという代りに、そのカテゴリーは《大いに强調されている》、または、この内容は《かくかくの方向に傾いている》といってよい場合もある。結局のところ、「兩者の敍述タイプはいずれも數量的である。ただ一方が他方より精密ではある。高度の精密さがつねに必要であるとか、望ましいということを、ここで確定的にいうわけにはゆかない。それは問題によるからである[14]」。

さて、以上のところを、ライツの『ボリシェヴィズムの研究』に照らしてみると、あえて彼の意向を訊すまでもなく、それは、ベレルソンのいう質的内容分析の範疇に屬していることは、疑う餘地がない。それは、嚴密な數値的測定の結果をあらわしてはおらず、印象的データとしてとどまっているけれども、方法としては、ボリシェヴィズムを内容分析した實驗的

試みである、といつて差しつかえなかろう。ともかく、内容分析と、その結果に精神分析をほどこしてみる手法とは、ライツがこれまでおこなつてきた幅廣い研究領域に一貫したものであり、たとえば、わが國にも最近飜譯された、彼とウオルフェンスタインとの共著『映畫の心理學』[15]などに、かかる研究のオリエンテーションが典型的なかたちで示されている。

ライツは、ボリシェヴィキの教義を分類すべき《カテゴリー》の體系として、以下のものを設定する。すなわち、豫測の範域と限界、過去および未來についての指向づけ、目的と手段、嚴密さと現實主義、感情のコントロール、行動へ向つて、忍耐力と柔軟性、力と技倆の徹底、努力の集中化、一枚岩性、分離と接觸、獨立性、欺瞞、暴力、プロパガンダ、敵對者、破滅の恐怖、抵抗と攻擊、退却、前進、同意、の二十一がそれである。各々のカテゴリーは、さらにいくつかの細かなサブ・カテゴリー、ないしはテーマに分たれている。一、二の例を示すと、「感情のコントロール」には、(1)感情に對するコントロールの多樣性、(2)黨の方針に感情が侵入することの危險性、(3)感じ易さの危險性、(4)興奮の危險性、(5)情緒的な無自制の危險性、「破滅の恐怖」には、(1)破滅の闘い、(2)攻擊の絶えまなき危險性、(3)勝利を前にしての生存の不確かさ、がそれぞれ配されている。ライツは、これらの關連カテゴリーに、先に述べられたような莫大な資料群を分類してゆくわけである。

ここで注意しなければならないことは、ボリシェヴィキの教義として、ライツは、レーニンおよびスターリンのうみだした言語的記錄、sacred texts を分析しているばかりでなく、さらに、ロシア文學をも基礎資料として精緻に分析している點である。本書を通じて、われわれは、レーニンやスターリンの言葉と並んで、ドストエーフスキイやゴーゴリの言葉に出會わされる。その理由は、ライツによれば、ボリシェヴィキとは、ロシアの課題（プロブレム）を鋭く感受していたロシア・インテリゲンツィアから生成してきたもので、そのグループは《ロシア的人間》として、もしくは、《ロシア知識層》として、ロシア文學の隨處に表現を得ている。ボリシェヴィキは、かかる人物をあるいは受けつぎ、あるいは拒みながら、自らを表出している。したがつて、「（ボリシェヴィキ）以前の言葉は、表現されざるかたちにおいてボリシェヴィキの言葉が含んでいるもの

を、表現している」[16]と考えられるというのである。このような主張に對する賛否は後述に讓ることとし、先ず、ライツが、ボリシェヴィキのもつ思想や感情をその豐富な素材のうちに、どのように分析しているかをみなければならない。

本書は、まさに「驚異的な企て」[17]というべきであろう。その内容を要約することは、到底齒がたたぬばかりか、内容分析の性質そのものからして、要約することは、あまり意味のあることではない。かといつて、たとえひとつのカテゴリーをとつてみても、それを洩らさず記述するとなると、相當の分量にのぼらざるをえない。しかし、ライツの内容分析の適用を具體的に例示し、以て全體のパースペクティーヴを類推するためには、そうする以外に方法はない。なぜならばこの場合、内容分析の記述は、文章を引用することと同じではないからである。それ故、次節において、「行動へ向つて」というカテゴリーを内容分析のひとつの適用例として選び、きわめて限定的にではあるが、その素描を試みたい。

(1) Nathan Leites, The Study of Bolshevism, Glencoe, Ill., The Free Press, 1953. ボリシェヴィスム研究に關連した論文としては、"Aspects of Politburo Behavior" in *World Politics*, vol. III, No. 4, July 1951 および "The Politburo Through the Western Eyes" in *World Politics*, Vol. IV, No. 2, January 1952 がある。前者は、James Bernham, The Coming Defeat of Communism, New York, John Day, 1950 に對するレヴュー・アーティクルである。後者は、ロンドン『エコノミスト』誌の描くモスクワ・ポリトビューローのイメージ（一九四六年二月九日から一九五〇年六月二十五日までの時期における）を分析・批判したものである。

(2) Nathan Leites and Elsa Bernaut, Rituals of Liquidation : The Case of Moscow Trials, Glencoe, Ill., The Free Press, 1954.

(3) Ibid., p. 5.

(4) Leites, op. cit., p. 22.

(5) Bell, loc. cit., p. 339.

(6) Leites, op. cit., p. 20.

(7) Ibid., p. 22.

（8）Bernard Berelson, Content Analysis in Communication Research, Glencoe, Ill., The Free Press, 1952, p. 9.

（9）Abraham Kaplan and Joseph M. Goldsen, "The Reliability of Content Analysis Categories" in Harold Lasswell, Nathan Leites and Associates, Language of Politics: Quantitative Semantics, New York, Stewart, 1949, p. 83.

（10）Berelson, op. cit., p. 18.

（11）ベレルソンによれば、現在のところ、すべての問題、すべての素材に對して適應可能な内容分析のカテゴリーというものを、定式化するにいたつていない。勿論、幾組かのカテゴリー・セットが考案されている。しかし、重要なことは、分析者が、研究すべき問題にとつて、もつともふさわしいカテゴリーを工夫し、調査過程で再吟味しながら、問題、假設、カテゴリーをテストしてみなければならないことである（cf., Ibid, ch. V.）。

（12）Ibid., p. 128.

（13）Leo Lowenthal and Norbert Guterman, Prophets of Deceit: A Study in the Techniques of the American Agitator, New York, Harper & Brothers, 1949. 辻村明譯『煽動の技術――欺瞞の豫言者』（一九五九年、岩波書店）XVIii 頁。なお、この前頁には、「レオ・ローウェンタールとノーバート・グダーマンによる本書は、質的分析（qualitative analysis）に限定されている。煽動の材料のうちにみいだされる觀念や決り文句や策略の頻度ではなく、デマゴギーの意味、そのテクニックやアピールの仕方、その論議やパーソナリティの意味といつたことがテーマである」と、ホルクハイマーは明記している。

（14）Berelson, op. cit., p. 116. 質的内容分析の特性について簡單に記せば、それは特定内容の存否（presence-absence）のみを問題とし、量的頻度を問う必要のないような場合、ロールシャッハ法やＴＡＴのような投射法テストに、内容分析を適應するときなどに、もちいられる。質的分析は、わずかな、不完全なサンプルしか得られないときになされる。またそれは、内容そのものの記述をおこなうというよりか、むしろ内容外のもの（non-content）、傳達者（コミュニケーター）の意圖とか、受容者（オーディエンス）への効果とかを中心課題とする場合に多くみられる。量的内容分析にくらべると、質的内容分析はどちらかというと、内容自體ではなく、《より深層にある》現象の《反映》に關心をよせている。煽動者のプロパガンダ分析を通じて、そのイデオロギー現象を顯示するとか、ドイツ映畫を基礎資料として、時代の精神史（Geistesgeschichte）を解明するとかいう研究がそれである。また、質的内容分析は、量的内容分析ほど、形式化したカテゴリー化を使用しないということ、それは、複雜なテーマを取扱うということなどが指摘せられる。

量的内容分析と質的内容分析は相互に排除しあうものではないのである。われわれは、「《量的》分析者は、そのカテゴリーをできるだけ重要な《豐富な》問題に感應し易くするように努めるべきである。他方、《質的》分析者も、分析のためのより豐富なカテゴリーを案

出し、發展させるように、自らの想像力を絶えずはたらかせ、さらに一歩すすんで、彼らが假設を充分に、かつ明晰に敍述するよう責任をとるべきである。……いずれにせよ、こうしたことが、《量的》立場と《質的》立場を主張するものの構成的統合化へいたる途となるように思われる」(Ibid., pp. 133-134) という指示を尊重しなくてはならない。それに反して、なんでも數えたてることが客觀的記述であるというのは滑稽であり、その結果はかえって、「實體なき客觀性という贋物」(Ibid., p. 130) にしかすぎないこともありうる。數量化への偏執は、內容分析に限ったことではないけれども、それがとくに、內容分析に惡名をあたえてきているという批判も當然のことである。

(15) Nathan Leites and Martha Wolfenstein, Movie: A Psychological Study, Glencoe, Ill., The Free Press, 1950. 加藤秀俊・加藤隆江譯『映畫の心理學』(みすず書房、一九五六年) 本書は、一九四五年下半期のアメリカ映畫のデータに基づき、イギリス・フランス映畫とも比較對照させながら、映畫に頻繁にあらわれるテーマ (戀人たち、殺人犯など) を內容分析したものである。

(16) Leites, op. cit., p. 21.

(17) Resleter, op. cit., p. 4.

三

「行動へ向つて」は、(1)行動を中斷してしまうことの危險性、(2)たんなる切望にとどまつてしまう危險性、(3)饒舌だけの危險性、(4)遲滯癖の危險性、という四つのサブ・カテゴリーから成る。

(1) 行動を中斷してしまうことの危險性

ボリシェヴィキは、不活潑なたるんだ性質に反對する。ドストエーフスキイの『地下生活者の手記』における主人公のように、

……生涯なに一つ始めることも、完成することも出來ない……(1)

ようなロシア的性格を、極度にいましめるのである。ツルゲーネフの『ルーヂン』は、そのような典型的人物である。ルーヂンはレジーネフが語つているように、

活動力や、それの考えを實行する能力を天から拒まれている……。(2)

チェーホフの『櫻の園』の人物トロフィーモフはいう。

僕の知つているかぎりインテリ〔ゲンッィヤ〕の大多數は、何ひとつ求めもせず、何ひとつしもせず、さしあたり勤勞に適しません。(3)

これに對して、『三人姉妹』の一人物は、

今や時代は移つて、われわれ皆のうえに、どえらいうねりが迫りつつあります。たくましい、はげしい嵐が盛りあがつて、もうすぐそこまで來ている。まもなくそれは、われわれの社會から、怠慢や、無關心や、勤勞への色めがねや、くされきつた倦怠だのを、一掃してくれるでしよう。僕は働きますよ。あと二十五年か三十年もしたら。人間はみんな働くようになりますよ。一人のこらずね！(4)

と豫言する。しかし、一九二二年においても、レーニンは、ロシア人の無能さの象徴たるオブローモフ的人間の存在に、激しく抗議せざるをえないのである。

……古いオブローモフがのこつていたぞ、いくらか役にたつようにするには、彼を長いあいだあらつたり、きよめたり、ひつぱたいたり、たたいたりしなければなるまい。(5)

一九一八年には、

われわれは、……眞の組織者をためし、みわけるようにつとめよう。眞の組織者とは、……社會主義にたいする忠實さとさわがずに（混亂や騒ぎがあつても）ソヴェト組織のわくのなかで、多くの人々のがつちりと協力した共同作業を組みあげる能力とをかねそなえた人である。(6)

と述べられている。スターリンは、《レーニン主義的スタイル》について、こう語つている。

このスタイルの特徴はなにか、その特質はどんなものか？　この特質は二つある。

(イ)ロシア的な革命的進取の精神と、

(ロ)アメリカ的な事務能力である。

レーニン主義のスタイルは、……これら二つの特質を結びつけることである。ロシア的な革命的進取の精神は……見通しをあたえるものである。それは、實踐のうえで中身のない「革命的」マニロフ主義に退化する恐れを十分にもっている。このような退化の例は――いくらでもある。「革命的」な作文癖や「革命的」な計畫作りの病氣は、だれ知らぬものはないだろう……。[7]

行動へ向うのではなく、自己の内面へ向う惡弊は、一八四〇年代のロシア・インテリゲンツィアに特徴的にみられるものであり、われわれは、ゲルツエンによつて描寫された次の表現に、それを窺うことができる。

若い人たちは、二十歳にもならぬうちに憂うつ症に罹り、疑い深く疲れ果てていた。彼らはすべて、自己觀察と自省と自責の熱にかぶれていた。彼らは入念に自分自身の心理的徴候を研究し、自分自身の神經病の病歴について、果てしのつかぬ討論と身の上話をすることを愛していた。[8]

このような孤獨な習性――無氣力な自己破壞的性質こそ、レーニンがつよく拒否しようとしたものであつた。一九一三年、彼は、ゴーリキィの《求神論》、あるいは《建神論》への思想的執着を批判して、つぎのような手紙を書き送つている。

ところで、建神論は自己卑下の一番いけない型ではないでしょうか？　神の創造にたずさわっている人、あるいはただそういう創造を許している人であっても、およそそういう人はみな、「行動」のかわりに、まさに自己觀照、自己享樂にふけりつつ、もっとも惡い仕方で自己卑下をしているわけで、この場合こういう人間が「觀照する」のは、建神論によって神格化された自分の「自我」の、もっともきたならしい、愚鈍な、奴隷的な容貌あるいは輪廓なのです。……あらゆる建神論は、……愛情をこめて自ら觀照することに他ならないのです……。[9]

(2)　たんなる切望にとどまつてしまう危險性

世界を變革しようという熱烈な願望、しかしただそれだけにとどまつてしまうことは、決して許されない。だがそれこそまた、ロシア人特有の性格でもある。レールモントフの『現代の英雄』の主人公、ペチョーリンはつぎのように回想する。

青春のはじめには、私は空想家であつた。私は私に……想像が描いてみせる、あるいは悲しく、あるいは樂しい姿を、かたみ代りに愛撫するのが好きであつた。けれどもそれから私に何が殘つたであろう？　ただ、幻想を相手の夜の戰いの後のような疲勞と、苦慘に滿ちた茫漠たる記憶ばかりである。この空しい戰いにおいて、私は魂の熱情と、實生活に缺くべからざる意志の不變性とを浪費し盡してしまつた。(10)

ゴーゴリは、『死せる魂』のなかで、

チェンチェトニコフは……本を讀んでいるし、理窟を並べたてるし、なにごとによらず、――なんのために、どういうわけで？――とその原因を我と我が身に納得させようとする……。(11)

人物を描いている。同じように、ドストエーフスキイは、次のような人物を描く。

彼は絶え間なく、いつかはその逆境から脱れ出て、いくらかの金を蓄えた後、ペテルブルグへ出ようという考えで、やつとわれとわが身を支えていたのです。けれども、その考えも漠然としたあやふやなものでした。それは何か否應のない內部の呼び聲でしたが、しまいには年とともに、當のエフィーモフの眼にさえ、最初の輝きを失つて、やつとペテルブルグへ著いた時には、何かしらのべつ願望する古い習慣の力、この旅のことばかり考える習慣の力によつて、ほとんど無意識的な働きをするにすぎない有樣、首都へ出たら何をするようになるのか、もう自分にもはつきり分らないくらいでした。(12)

チェーホフの『六號室』の人物、

アンドレイ・エフィームイチは、知性と誠實さを愛好する點では、あえて人後に落ちない。しかし自分の周圍に知的で誠實な生活をきずきあげて行くためには、彼は意志の力と、自分の權利にたいする信念とを缺いている。(13)

ゴーリキィの言葉によれば、

……ロシアの人間は、おのれのために生活を考え出すことには慣れていて、その生活をすることとなると不得意なのだ……。(14)

また、ゴーリキィは、チェーホフの小説にあらわれている人物を評して、

彼らの多くの者は、二百年たつたら生活はどんなによくなるであろうかと美しく空想する。けれども誰ひとりの頭にも、簡單な疑問が來ないのである。われわれがただ空想しているだけだとしたら、誰がそれをよくするのか。[15]

以上のごとき《夢想する人間》に對して、ボリシェヴィキは《行動する人間》を對置する。けれども、夢想自體があながち悪いものであるというのではない。それは、レーニンのいうごとく、次のような場合にのみ肯定さるべきである。

「夢想すべきことである！」この言葉を書きおわつて、私は愕然とした。私は自分が「合同大會」に列席しており、『ラボーチェエ・デーロ』の編集局員たちや寄稿者たちが私にむかいあつてすわつているような氣がしたのである。いまそこに、同志マルトィノフが立ちあがつて、こわい顔をして私に言葉をかける。「ところでおたずねしたいが、自治的編集局には、あらかじめ黨のもろもろの委員會の意見も問いあわさずに夢想などする權利があるのか？」と。するとつづいて同志クリチェフスキーが立ちあがつて……もつとこわい顔をして、ひきとつて言う、「私はもつと突つこんでたずねよう。もし、マルクスによれば、人類はいつも自分で解決できる任務だけを自分に提起するものであり……マルクス主義者ともあろうものが、ぜんたい夢想などをする權利があるのか？」と。

このおそろしい質問をおもつただけで、私は膚がさむけだつてくる。そこでどこに身をかくそうかと、そればかり考える。ひとつピーサレフのうしろにかくれてみることにしよう。

ピーサレフは、夢想と現實の不一致という問題についてつぎのように書いている。「一概に不一致といつてもいろいろのものがある。私の夢想が諸事件の自然の歩みを追いこすこともあろうし、諸事件の……歩みもそこまではけつして到達できないような、まつたくのわき道にはいりこむこともありうる。まえのばあいには、夢想はどのような弊害ももたらさない。それは、勤勞する人の精力を維持し、つよめることさえできる。……このような夢想には、働く力をゆがめたり、麻痺させたりするものはなにもない。むしろ反對でさえある。……夢想する人物が生活を注意深く熟視しつつも、眞剣に自分の夢想を信じ、自分の觀察と自分の空中樓閣とを引きくらべ、總じて、自分の空想の實現のために誠實に働きさえするなら、夢想と現實との不一致は、どのような弊害ももたらすものではない。夢想と生活とのあいだになに

かの接觸があれば、萬事は順調に行われる。[16]

かくて、ボリシェヴィキは、《白晝夢》、《願望》、《思慕》といつたようなものを輕蔑視し、行動にそなえるのではなく、ただある態度を掻きたてるようないかなる政策をも拒否する。一九〇五年、レーニンは、勞働者の武裝をめぐる問題で、メンシェヴィキの態度を手きびしく非難し、次のようにいう。

そうだ、そうだ、これは眞に深遠な問題の提起である……。重心は、武裝させるための活動にも、組織の系統的な準備にもなくて、武裝しようという、しかも自己武裝しようという、燃えるような欲求で人民を武裝しようというところにある。われわれの運動をうしろへ引きもどそうと試みるこの俗物的卑俗さ云々……。[17]

同様な調子で、レーニンは一九〇六年、メンシェヴィキによつて支配された中央委員會の立場を批判している。

權力獲得の問題では、中央委員會はプロレタリアの唯物論的立場ではなしに、いきなり小ブルジョワの觀念論的立場にたつている。中央委員會は權力の「自然の繼承」をもつとも廣く普及した「意識」（人民の「見るところでは」）からひきだしていて、鬪爭の現實的條件からひきだしていない。「自然の繼承者」となるのは、だれでもの「意識」のなかで「このような役割を演じる」ものではなくて、實際に、政府を打倒するもの、實際に權力を獲得するもの、鬪爭で勝利するものであることを、中央委員會は理解していない。鬪爭の結末を決定するのは、「全人民の意識」ではなくて、社會のいずれかの階級といずれかの分子の力である。……中央委員會の實踐的結論は、「いまや、あらゆるところで地方的な大衆的抗議表明を組織する必要がある」と述べている。抗議表明の目的は、文字通り、「間近かな決定的鬪爭を準備する雰圍氣をつくりだすこと」と規定されている。……間近かな決定的鬪爭の準備をすることではなくて、準備する雰圍氣をつくりだすことだ……。[18]

（3）饒舌だけの危險性

ボリシェヴィキは、ロシア・インテリゲンツィアの陷りがちな論議癖、言葉に至上の價値をおいて、虚榮心を滿足させる

誘惑に反對する。ツルゲーネフの『ルーヂン』の主人公は、「自分が何を求めているかも分らずに、言葉に醉い、幻想を信じていた」無爲の生活を回顧しつつ、

——口先だけさ、いつも空論だよ！　仕事なんかなにもしやしなかつたもの！　……この體裁というやつは確かに僕を破滅させたよ……。[19]

とつぶやく。一九〇六年、レーニンは述べている。

小ブルジョワには、つねに紙きれを問題の本質と見る傾向がある。[20]

と。『櫻の園』の女地主ラネーフスカヤの兄ガーエフは、土地を買戻すための術もなく、ただ卽興的な計畫を喋々する。

三方から運動すれば——もうこつちのものだ。利子は拂えるさ、斷じてね。……（氷砂糖を口へ入れる）わたしの面目なりなんなり、なんでもかけて誓うが、この領地は賣られるものかね！（興奮して）ぼくの幸福にかけて誓う！　さあ、この手が證人だ（片手を相手にさし出す）——もしこの僕が、ずるずる競賣へまで持ちこませたら、その時こそ僕を、やくざとでも恥しらずとでも言うがいい！　ぼくの全存在にかけて誓うよ！[21]

だが一方では、このような言葉にだけ賴ることをどうにかして克服しようとする努力も見受けられないではない。かのルーヂンは、

……空理空論に、實に益もないお喋りに、ただの饒舌に自分の力を浪費してはならないのです……。

そして彼は、滔々と辯じ立てた。薄志弱行の恥ずべきことを、仕事をしなければならぬことを、鮮かに熱と信念をこめて論じた。[22]

また、ドストエーフスキイの『惡靈』において、ステファン・トロフィモヴィッチはいう。

……わがロシアの國では、ほとんど數え切れぬほどの人達が、實にどうも恐ろしい劍幕で、……うるさく執拗に、人の非實際的性質の攻擊を唯一の仕事にしている。そして自分以外の人間を誰かれの差別なく、手當り次第に『非實際的だ』といつて非難する。[23]

『三人姉妹』の一人、イリーナは、

人間は努力しなければならない。だれだつて額に汗して働かねば。そこにこそ、人生の意義も目的も、その幸福も、その悦び（よろこび）や感激も、のこらずあるのよ。夜の明けるか明けないうちに起きだして、街で石をトンカチやる労働者や、羊飼い、子供たちを教える先生や、鐵道の機關手になつたら、さぞいいでしようね。……ほんとに、人間であるとかないとかの問題じやないわ、ただ働けさえすれば、いつそ牛にでも、ただの馬にでも、なつたほうがましよ——お晝の十二時にのこのこ起きだして、ベッドのなかでコーヒーを飲んで、それからお召替えに二時間もかかる……ああ、おそろしい、そんな若い女になるよりはね！[24]

と語調を強めていう。

ボリシェヴィキは、ロシア・インテリゲンツィアのもつ冗漫さ、わめきたてては緊張をときほぐすような生活態度に對して、ネチァーエフのいう「行動に向つて、怠惰なおしやべりを避けるような革命的洞察」[25]を、ことさら強調する。それと反對に、ロシア革命家のうちには、空文句だけを語る連中がいかにも多い。クループスカヤは『レーニンの思い出』のなかで、ミュンヘン郊外のシュワービングにおける生活を、次のように傳えている。

正午過ぎに、晝食の後で、マルトフその他の人々がやつてきて、いわゆる「編集」會議を開いた。マルトフは、ひつきりなしにしやべり、たえず一つのテーマから別のテーマへと話題を變えた。彼はたくさんの本を讀んでおり、いつも珍しいことをどこからか山ほど聞きこんできて、何でも彼でもよく知つていた。……ウラヂーミル・イリイッチは、毎日五、六時間も話しこまれるので、おそろしく疲れ、すつかり弱つてしまい、仕事ができなくなつた。あるとき彼は、私をマルトフのところにやつて、私たちのところへ來ないようにしてくれと頼ませた。私がマルトフのところへ行つて、受け取つた郵便の話をし、彼と話し合うことにきまつた。しかし、それは何にもならないで、二日もたつともと通りになつてしまつた。マルトフは、おしやべりをしなければ暮していけなかつたのである。彼は私たちのところから、ヴェラ・イヴァノヴナ、ジムカ、ブリューメンフェルトといつしよにカフェに行つて、そこで何時間も話しこむのであつた。[26]

そして、レーニンは、一九〇一年、次のように書いている。

ロシアの自由主義者の大衆のあいだには、疑いもなく、つぎのような偏見がひろく行きわたつている。すなわち、ゼムストヴォは……言

葉のうえで専制に敵對している人々に、專制にたいする革命的鬪爭をあれこれの形で積極的に支持する義務を免除してやるものであって、「大きな政治的意義」をもっている……ということである。[27]

レーニンは、一九一四年、當時ロシアが呼吸していた政治的空氣、反動家プリシケヴィッチ一派が自己の階級利害をまもるためにおこなっている「ポグロム」政策に、たわいない自由主義的反對を唱えている態度に對し、ボリシェヴィキ的な斷固たる立場を表明して、次のように述べている。

この階級ときっぱり、そして口先だけではなく、「けりをつける」か、それとも、ロシアの全政治のなかで「ポグロム的」雰圍氣が避けられないこと、取りのぞきえないことをみとめるか。この政策と和解するか、それとも、この政策に反對する人民、大衆の、まず第一にプロレタリアの運動を支持するか。どちらか一つである。ここには中間の道はありえない。[28]

一九一七年六月二十二日の「ソヴェト大會」の演說において、レーニンは、

……諸君が檄文や、他國民へのアピールだけで萬國の勤勞者を結合できるという幻想をいだくことができるのは、ただかぎられたロシア的見地からだけである。……西ヨーロッパの新聞が、このような空文句やアピールを嘲笑していることを、ロシアの人々は知らないのである。[29]

と强調している。一九一八年には、

ありとあらゆるむだ話はもうたくさんだ。いまや實務にうつるべき時がきている。[30]

と叫んでいる。さらに一九二〇年には、議會主義に口先だけで敵對するような「左派」の態度を論じて、

……オランダ人、一般に「左派」は……特定の反動的な機關を主觀的に「否定」することを……それを現實に破壞することだと、素朴にも勘ちがいしている……。議會的日和見主義に惡口を言うだけで、議會に參加することを否定するだけで、自分の「革命精神」を發揮することはあまりにもやさしい……。[31]

スターリンも、ロシア共産黨第十三回協議會での演説で、

辯舌を支配し統御するために辯舌をもつている人がいる。これは普通の人である。それから、自分で自分の辯舌に服從し、それに統御される人がいる。これは異常な人である。ラデックはこの種の異常な人のうちにはいる。[32]

と述べている。われわれはさらに、一九二八年の中央委員會總會において、農業經營の發展のテンポを實際に向上させるために、スターリンがおこなつた演說によつて、ボリシェヴィキの實踐行動の必要性を、はつきり看取することができる。

まず第一に、わが黨のカードルの注意を……穀物問題の具體的な諸問題に集中することが必要である。農業全般についての一般的なから文句やおしやべりをすてさつて、いまやついに、いろいろの地方の種々のことなつた諸條件に應じて、穀物經營を向上させることについての、實踐的な諸方策の作成にうつることが必要である。いまや言葉から實行にうつるべきときであり、そして、どのようにして……擴張するか、どのようにして……改善し、發展させるか、どのようにして……組織するか、どのようにして……〔農民に對する〕援助を組織するか、どのようにして……擴大し、改善するか、等々という具體的問題に、いまやついにとりくむときである。（「それは實用主義だ」という聲）そのような實用主義がわれわれには絶對に必要なのだ。なぜなら、それがなくては、穀物問題の解決というもつとも重要な事業を、農業一般についての空虛なおしやべりのなかにしずめてしまう危險があるからである。

中央委員會は農業の發展という問題について、……主だつた活動家たちが主要穀物地方別に具體的な報告をおこなうようにすることを、みずからの任務として提起した。……このことは、……穀物問題と關係ある諸問題を具體的に提起するという軌道に、わが黨のカードルをうつすようにするために、絶對に必要である。

第二に、農村におけるわが黨の活動が……富農をたたかねばならないときに、中農に手があつたりすることのないようにすることが、必要である。こういう誤り――と言わせてもらいたいが――を、いまやついに一掃すべきときである。たとえば、個人課稅の問題をとつてみよう。わが國には、農家戸數の二～三％以内、すなわち、富農層のもつとも富裕な部分に對する個人課稅についての政治局の決定と、それに對應する法律とがある。ところが實際にはどうなつているか？　一〇％、一二％、あるいはそれ以上のものに課稅し、こうして農民の中

農部分をおこらせている多くの地方がある。いまやこういう犯罪に終止符をうつべきときではないだろうか。

これらの、およびこれに類した醜態を一掃するための具體的な方法をたてるかわりに、わが愛すべき「批評家たち」は、「富農のもつとも富裕な部分」という言葉を「富農のもつとも力のある部分」、あるいは「富農のもつとも上層の部分」という言葉にとりかえることを提案している。まるでこれらがおなじものではないかのようである！　わが國には、富農はおよそ五％いるということが證明されている。……實際には、法律が多くの地方でやぶられていることが證明されている。ところが、「批評家たち」は、これらの現象を一掃する具體的な方法をたてるかわりに、口さきの批判をはびこらせており、それによつては事態はすこしもかわらないのだということを、理解しようとしていない。純粹の讀經者たちだ。(33)

しかし、ロシア人には、自分自身の言葉の悅に入つて、それをひとつも行動に移そうとしない傾向がある。つまり、

ルージンの言葉は……言葉に終つて、ひとつも行爲にならない。(34)

といわれるようにである。ブーニンの小說『村』における次の表現は、「言葉と行爲との不一致」ということをよくあらわしている。

われわれの何より好きなことで、そして、われわれの一番悪い特徵――それは、言葉は言葉、行いは行いだつてやつだよ！(35)

ボリシェヴィキは、あれこれ詮議だてをするインテリゲンツィア的衒學根性に反對し、言葉から行爲への、そして、何よりも行動による證明を尊重するのであつて、

……インテリゲンツィアふうな約束（「うまくいつている」、「プランは作成されている」、「力を發揮しよう」、「いまやわれわれは請けあう」、「改善は疑う餘地がない」、その他、「われわれ」が大いに得意とするペテン師的な言辭）……(36)

を嘲笑する。一九二二年、レーニンはいう。

きのう私は偶然、『イズヴェスチャ』紙上で、政治をテーマとしたマヤコフスキーの詩を讀んだ。私は彼の詩才の禮讃者ではない。もつ

とも、この方面で自分に資格がないことは十分みとめてはいるが。しかし私はまつたく久しぶりで、政治的および行政的見地から非常に大きな満足を感じた。彼はその詩のなかで、もろもろの會議をさんざんに笑いとばし、共産主義者がなにかといえば會議會議とさわぐのをあざけつている。詩についてはどうか知らないが政治については、それがまつたく正しいことを保證する。實際、われわれは、際限もなしに、いつも會議ばかりひらき委員會をつくり、計畫を立てる人間の狀態（この狀態は、非常にばかげた狀態であると言わなければならない）にある。昔はロシア生活のこうした型、すなわちオブローモフがあつた。彼は終日、寢臺に寢そべつて、計畫を立てていた。あのころからは多くの時がたつている。ロシアは三つの革命をやりとげたが、しかしオブローモフのような人間はまだのこつている。なぜなら、オブローモフは地主だつたばかりでなく、農民でもあるし、農民であるだけでなく、インテリゲンツィアでもあるし、インテリゲンツィアであるだけでなく、勞働者や共産主義者でもあるからである。われわれを一目見るだけで、われわれが會議をどうひらき、委員會でどう活動しているかを見るだけで、古いオブローモフがのこつている……と言いたくなる。(37)

スターリンも、一九二三年、

若干の同志諸君が無制限の討論を主張し、問題の審議を黨活動の始めであり終りであると考え、黨活動の他の面、すなわち黨の諸決定の實行を要求する行動的な側面をわすれてしまつた……。(38)

と指摘し、同じく、

りつぱな政治方針をあたえれば十分で、それで事はおわると主張するような人は、よもや諸君のなかにはいないであろう。しかり、それは事の半分である。正しい政治方針があたえられたのちに、指令を實行する能力のある……人々が、ポストにつくように活動家を選擇しなければならない。そうでなければ、政策は……手をふりまわすことだけに轉化してしまう。(39)

と主張している。けだし、ボリシェヴィキにとつては、黨の方針を遂行するための實踐と組織とがもつとも重要なものとされる。いたずらに言葉の全能性に溺れてはならないというボリシェヴィキの基本的態度は、一九五〇年、言語の問題に關して、スターリンが與えた解答のうちに、はつきり示されている。すなわち、

……だが、ひよつとすると言語を社會の生產力の部類に、たとえば、生產用具の部類にいれられはしないだろうか。なるほど、言語と生產用具とのあいだには若干の類似がある。つまり、生產用具にしても言語にしても、どの階級でもよいという一種の無關心をしめし、古い階級にせよ新しい階級にせよ、社會のいろいろの階級におなじように奉仕することができる。……言語と生產用具の類似は、たつたいま私ののべた類似でつくされる……。そのかわり、言語と生產用具には根本的な差異がある。この差異は、生產用具は物質的財貨を生產するが、言語はなにも生產せず、あるいは、たかだか單語を「生產する」だけだ、という點である。もつと正確にいえば、生產用具をもつ人間は、物質的財貨を生產することはできるが、言語をもつていても生產用具をもたない人間は、物質的財貨を生產することができない。言語が物質的財貨を生產できるなら、おしやべり屋が世界でいちばんの金持だということは、わかりにくいことではない。(40)

(4) 遲滯癖の危險性

ボリシェヴィキは、實効性のとぼしい、かつ優柔不斷なロシア的タイプを、徹底的にあらためようとする。例えば、ドストエーフスキイの『未成年』における主人公の次の言葉などがそれである。

私はリーザを抱きしめて、こんど宿命的な大決心をとつたから、これからそれを實行するところだ、とごく簡單に報告した。彼女はかくべつ驚いたふうもなく、ごくありふれたことのように聞き流した。實際、その當時、私がのべつ『最後の決心』をとつては、すぐ意氣地なく取り消してしまうのに、みんなもう馴れつこになつてしまつていたのだ。(41)

クループスカヤは、アクセリロードのことを、

パーヴェル・ポリスィチは、能力の四分の三を喪失し、幾晩も眠らずに、幾月も緊張して一つの論文を書いて、しかもそれを書き上げることができなかつた……。(42)

と記している。

一九〇五年、レーニンは、雜誌『プペリョード』の發刊に際して、「文筆上の協力を組織する」ことを求め、ボグダーノ

フへあたえた手紙に、こうつけ加えている。

こういう仕事にかけて、ロシア人は途方もなく、がまんできないほど、信じられないほどのろくさいことを、私は長い經驗から知っています。[43]

そしてまた、一九一九年、ロシア共產黨第八回全國協議會での演說においては、

もしわれわれの國家建設の經驗をしらべてみるなら、着手されて中途で放棄された建設……を、ひつきりなしに多數見いだすであろう。[44]

と警告を發している。政府職員に要求さるべきことは、仕事を中途で投げださずに、最後まで貫徹する能力である。そしてそれは、先程スターリンが《レーニン主義的スタイル》として言及したものにほかならない。さらに一九三四年、スターリンは、ソヴェトの國民經濟の當面の任務に關連して、

……完全にはととのわない製品の製造をやめ、製品の質と完備にかんするソヴェト權力の法律にそむくか、これをくぐるものは、人物のいかんをとわず、すべて處罰すること。[45]

と述べている。

ボリシェヴィキが深くいましめている引き延ばし癖は、黨に對して敵對者がしばしば用いる武器であるが、それはまたボリシェヴィキ自身が敵對者に對して有利にことをはこぶための、手口でもある。ロシア社會民主勞働黨第二大會についての報告のなかで、レーニンは次のようにいっている。

ブンド派……はことごとに議事妨害をやり、どんな問題についても、この委員會――私もそのなかにはいっていた――の他の委員に同意せず、つねに「獨自の見解」を固持していた。そんなやり方では大會を長びかす恐れがあるという注意にたいして、このブンド派は「長びいてもかまわない」とこたえ、何時間でも委員會の會議をつづけるつもりであることをしめした。[46]

そしてまた、

黨大會の Tagesordnung 第二項目は、黨綱領にあてられていた。「ラボーチェ・デーロ」の支持者、ブンド派、いろいろな個々の代議員たち――彼らは大會のときには、「沼地」派というあだ名をあたえられていた――は、はなはだしい議事妨害をやつた。綱領にかんする討論は信じがたいほど長びいた。アキモフだけでも一〇以上の修正提案をもちこんだ。文字どおり一語一語が、一つ一つの接續詞が、論爭のたねとなつた。……ブンド派のひとり……が、われわれはいつたいだれの草案を檢討しているのか、『イスクラ』編集局の提出している草案なのか、それともアキモフのもちこんだものなのか、と質問したのは、まつたくもつともであつた。――それほどたくさんの修正提案を審議しなければならなかつたのである。これらの修正提案はとるにたりないものであつた。(47)

行動を完全におこなわぬことは、ロシア人にしばしば見受けるところの、多樣な企てにエネルギーを散逸させてしまつたり、途轍もない目的を抱いたりする性質とも關連している。ゴーゴリはそういつた人物を『死せる魂』で描いている。

晝食の二時間前になると、彼は著述に專念するために、自分の書齋に立ち去つて行く。この著述とは、社會的・政治的・宗教的・哲學的とあらゆる觀點から、全ロシアを包括し、時代によつてロシアに提出された多くの難問、難題を解決し、その偉大なる未來を明確に判定せねばならぬ、というので、早い話が、現代人が好んで自らに課するあのやり方になにもかもそつくりで、形式もあのとおりだつた。もつともこの大仕事もとかく企畫倒れになつてしまうことのほうが多く、ペンが嚙み碎かれ、紙に樂書が現れ、やがてそれがみんな脇の方へどけられて、代りに本が取り上げられると、もうそれは晝飯までは手放されない、というふうだつた。(48)

こうした態度に對して、ボリシェヴィキは、たとえその目的が巨大な事業であつても、つねに次の一歩を著實に踏みしめ、跡絶えることない努力を要求する。スターリンはいう。

黨が自分自身の決定と指令との遂行を系統的に點檢することが必要である。これなしには、それらの決定や指令はからつぽな公約になつてしまう……。(49)

彼は、十年後にも、繰返して、

實行の點檢を正しく組織することは、官僚主義や役人根性にたいする鬪爭にとつて、決定的な意義をもつている。指導機關の決定が遂行されているか、それとも官僚主義者や役人根性の連中によつてほうりつぱなしにされているか。決定が正しく遂行されているか、それとも、ゆがめられているか。機關がまじめに……活動しているか、それとも、からまわりしているか？　すべてこうしたことを適時に知ることは、實行の點檢がよく組織されている結果として、はじめてできることである。よく組織された實行の點檢は、機構の活動狀態をいつでも知るための……探照燈である。われわれは確信をもつてこう言うことができる、――われわれの手落や缺陷の一〇分の九は、正しく組織された實行の點檢がないことによるものである。このような實行の點檢があるなら、手落や缺陷が確實に豫防されることは、疑いの餘地がない。(50)

以上の分析から、ボリシェヴィキが行動に對していかなる主張をなしているかが、明瞭にされうるであろう。ボリシェヴィキは、內省的生活に沒頭しがちな誘惑に屈してはならない。彼は、世界變革に對するただたんに善意からする憧憬をのり超えるべきである。幻想（ファンタジー）というものは、それが行動を强制するものに限つて許される。彼は言葉を過大評價してはならず、言葉と行爲との不一致という危險性に、いつも注意を配らねばならぬ。そしてなおかつ、行動をおこすに緩慢であつてはならず、臨機の處置に手早く、完全を期さねばならない、というわけである。

（1）ドストエーフスキイ『地下生活者の手記』米川正夫譯、ドストエーフスキイ全集（河出書房新社、一九五八年）、第五卷二八七頁。
（2）ツルゲーネフ『ルーヂン』中村融譯、ロシア文學全集（修道社、一九五八年）第二十卷二六九頁。
（3）チェーホフ『櫻の園』神西清譯、世界文學大系（筑摩書房、一九五八年）第四十六卷四三七頁。
（4）チェーホフ『三人姉妹』神西清譯、同右三七九頁。
（5）レーニン「ソヴェト共和國の內外情勢について、金屬勞働者第五回全ロシア大會共產黨グループでの演說」（一九二二年三月六日）マルクス＝レーニン主義研究所譯（大月書店）レーニン全集第三十三卷二二三頁。
（6）レーニン「ソヴェト權力の當面の任務」（一九一八年三―四月）全集二十七卷二六五頁。

(7) スターリン「レーニン主義の基礎について」(一九二四年四月) スターリン全集刊行會譯 (大月書店) スターリン全集第六巻一九九—二〇〇頁。
(8) E. H. Carr, The Romantic Exiles, p. 126 酒井只男譯『浪漫的亡命者たち』(筑摩書房、一九五三年) 一三九頁。
(9) 除村吉太郎監修『レーニンのゴーリキーへの手紙』(日月社、一九五四年) 一六七—一六八頁。
(10) レールモントフ『現代の英雄』中村白葉譯 (岩波文庫版) 二五二頁。
(11) ゴーゴリ『死せる魂』中村融譯、ゴーゴリ全集 (河出書房、一九五三年) 第三巻三七一頁。
(12) ドストエーフスキイ『ネーストチカ・ネズヴァーノヴァ』全集第一巻二七一頁。
(13) チェーホフ『六號室』木村彰一譯、世界文學大系第四十六巻一六四頁。
(14) ゴーリキイ『追憶』湯淺芳子譯 (岩波文庫) 下巻三六頁。
(15) ゴーリキイ、同右一一一頁。
(16) レーニン「なにをなすべきか? われわれの運動の焦眉の諸問題」(一九〇二年) 全集第五巻五五一—五五二頁。
(17) レーニン「われわれは革命を組織すべきか?」(一九〇五年二月二十一日) 全集第八巻一六五頁。
(18) レーニン「政治的危機と日和見主義的戰術の失敗」(一九〇六年八月二十一日) 全集第十一巻一四三—一四七頁。
(19) ツルゲーネフ『ルーヂン』一一一—一一二頁。
(20) レーニン「カデットの勝利と勞働者黨の任務」(一九〇六年) 全集第十巻二〇二頁。
(21) チェーホフ『櫻の園』四三一頁。
(22) ツルゲーネフ『ルーヂン』四〇頁。
(23) ドストエーフスキイ『惡靈』II、全集第十巻六〇頁。
(24) チェーホフ『三人姉妹』三七九頁。
(25) Michail Bakunin, Sozial-politischer Briefwechsel mit A. I Herzen und Ogarjow, p. 379 ライッの引用 (原書二一六頁) による。
(26) クループスカヤ『レーニンの思い出』内海周平譯 (青木文庫) 上巻八一頁。
(27) レーニン「ゼムストヴォの迫害者たちと自由主義のハンニバルたち」(一九〇一年六月) 全集第五巻六七—六八頁。
(28) レーニン「民族政策の問題によせて」(一九一四年四月) 全集第二十巻二二六—二二七頁。

(29) レーニン「勞働者・兵士代表ソヴェト第一回全ロシア大會」（一九一七年六月三日―二十四日）全集第二十五卷一九頁。
(30) レーニン「國民經濟會議第二回全ロシア大會での演說」（一九一八年十二月二十六日）全集第二十八卷四〇八頁。
(31) レーニン「共產主義內の『左翼主義』小兒病」（一九二〇年四―五月）全集第三十一卷四八―五〇頁。
(32) スターリン「ロシア共產黨（ボ）第十三回協議會」（一九二四年一月十六―十八日）全集第六卷五五頁。
(33) スターリン「國の工業化およびソ同盟共產黨（ボ）內の右翼的偏向について、ソ同盟共產黨（ボ）中央委員會總會における演說」（一九二八年十一月十九日）全集第十一卷二九一―二九三頁。
(34) ツルゲーネフ『ルーヂン』五〇頁。
(35) ブーニン『村』中村白葉譯、ノーベル賞文學叢書17（今日の問題社、一九四二年）六二頁。
(36) レーニン「われわれの新聞の性格について」（一九一八年九月二十日）全集第二十八卷九五頁。
(37) レーニン「ソヴェト共和國の內外情勢について、全屬勞働者第五回全ロシア大會共產黨グループでの演說」（一九二二年三月六日）全集第三十三卷二二三頁。
(38) スターリン「黨の諸任務について、ロシア共產黨（ボ）クラースナヤ・プレースニヤ地方區委員會擴大會議での報告」（一九二三年十二月二日）全集第五卷三七三頁。
(39) スターリン「ロシア共產黨（ボ）第十二回大會」（一九二三年四月十七日）全集第五卷二一七頁。
(40) スターリン「言語學の若干の問題について同志クラシェニンニコフへの答」スターリン戰後著作集（大月書店）一六四―一六五頁。
(41) ドストエーフスキイ『未成年』全集第十一卷五二三頁。
(42) クループスカヤ『レーニンの思い出』上卷七四頁。
(43) レーニン「ア・ア・ボグダーノフへの手紙」（一九〇五年一月十日）全集第八卷二七頁。
(44) レーニン「ロシア共產黨（ボ）第八回全國協議會」（一九一九年十二月二日―四日）全集第三十卷一七五頁。
(45) スターリン「ソ同盟共產黨（ボ）中央委員會の活動にかんする第十七回黨大會への一般報告」（一九三四年一月二十六日）全集第十三卷三四一―三四二頁。
(46) レーニン「ロシア革命的社會民主主義在外連盟第二回大會」（一九〇三年十月十三日―十八日）全集第七卷六四頁。
(47) レーニン、同右六七―六八頁。
(48) ゴーゴリ『死せる魂』三四三頁。

(49) スターリン「ドイツ共産黨の前途とボリシェヴィキ化とについて」（一九二五年二月三日）全集第七卷五二頁。

(50) スターリン「ソ同盟共産黨（ボ）中央委員會の活動にかんする第十七回黨大會への一般報告」（一九三四年一月二六日）全集第十三卷三九四―三九五頁。

（未完）